

# 忍者の言語学

秋 月 高 太 郎\*

The language of NINJA

Kotaro Akizuki

日本のフィクションの世界には、忍者をモデルに造形された忍者キャラクターが登場することがある。彼らはその姿や行動ばかりでなく、ことばづかいにも特徴がある。戦後の日本のマンガに登場する忍者キャラクターは、老忍、少年忍者、青年忍者、女忍者の4つに分類することができる。ことばづかいの点から見ると、老忍は〈老人語〉を、少年忍者は「せっしゃ」や「ござる」といった〈忍者語〉（または〈侍語〉）を、女忍者は〈お嬢様語〉を話す傾向がある。青年忍者は役割語を用いない。ただし、忍者キャラクターのことばづかいは、それぞれに与えられた特別なキャラクター性によって変異を見せることがあり、忍者という属性とことばづかいに強い結びつきがあるとは言えない。

キーワード：役割語、忍者、老人語、標準語、お嬢様語

## 1. はじめに

かつて日本には「忍者」、または「しのび」と称された人々がいた。吉丸（2014）によれば、忍者とは「十四世紀以降に活躍した、平時に敵地に侵入して偵察・情報収集を行い、戦争時には偵察のほか、敵陣・敵城に侵入して放火などの破壊活動や暗殺を行った者」のことである。彼らがいつごろまで実在し活動していたのかは明らかでないが、近世以降、日本のフィクションの世界では彼らをモデルに造形されたと考えられる人物が繰り返し登場してきた。幕末には合巻『児雷也豪傑譚（じらいやごうけつものがたり）』に登場する児雷也、大正期には立川（たつかわ）文庫から出版された文庫小説本シリーズに登場する猿飛佐助（さるとびさすけ）や霧隠才蔵（きりがくれさいぞう）、戦後には山田風太郎の『甲賀忍法帖』などの小説、白土三平の『サスケ』や横山光輝の『伊賀の影丸』などのマンガに登場する服部半蔵（はっとりはんぞう）がいる。彼らは、そのモデルとなった人物が実在するとしても、それとは異なった、小説やマンガといったフィクションの世界における登場人物として造形されている。彼らを「忍者キャラクター」と呼ぼう。戦後のマンガや映画に登場する忍者キャラクターは、刀や手裏剣といった武器を身につけ、黒っぽい服装で全身を包んでいる。また彼らは身軽で、猿のように木から木に飛び移ったり、忍術を使って突然姿を消したり現したりする。このような忍者キャラクターの姿や行動を繰り返し目にする中で、私たちの中には忍者キャラクターのイメージが形成されている。忍者キャラクターのイメージ形成には、その姿や行動ばかりでなく、

---

2014年9月10日受理  
\* 尚綱学院大学 教授

彼らのことばづかいも含まれる。以下は、マンガに登場する忍者キャラクターのセリフである。

- (1) a. せっしゃは さるとび さすけで ござる  
 b. せっしゃ ハットリ カンゾウ と申す

(1a) は杉浦茂の『猿飛佐助』の主人公さるとびさすけが、(1b) は藤子不二雄<sup>④</sup>の『忍者ハットリくん』の主人公ハットリカンゾウが登場するシーンのセリフである。彼らは、「せっしゃ」「ござる」「申す」といった特徴的なことばづかいをしている。本稿では、戦後のマンガに登場する忍者キャラクターのことばづかいに注目し、彼らが用いることばにはどのような特徴があるのか、役割語の視点から明らかにする<sup>1), 2)</sup>。

## 2. 忍者キャラクターの分類

忍者は、日本の中世から近世にかけて存在した特殊技能集団である。それゆえ、武家社会特有の身分に基づいた階層構造をもつ。図1は、忍者の身分とその階層関係を示したものである。忍者の社会は、「首領」である「上忍」を頂点とし、その下には「大頭」と呼ばれる「中忍」、さらにその下には「下人」を従えた「小頭」と呼ばれる「下忍」の集団から構成されている。下位の忍者はより上位の忍者に絶対の忠誠を誓わされており、もし下位の忍者が上位の忍者の命令に背くようなことがあれば、「忍者の掟」にしたがって処罰を受けることになる。

フィクションの世界に登場する忍者キャラクターも、現実の忍者をモデルにしている以上、このような身分制度に基づいた人物集団として描かれることになる。つまり、忍者キャラクターは、その作品内で、「上忍」「中忍」「下忍」のような、異なった身分のキャラクターとして設定されて登場してくるのである。このような身分の異なりは、それぞれの忍者キャラクターのことばづかいにも反映すると考えられる。たとえば、「上忍」の忍者キャラクターのことばづかいと「下忍」の忍者キャラクターのそれには異なりがあることが予測される。そこで本稿では、マンガに登場する忍者キャラクターを、①老忍、②少年忍者、③青年忍者、④女忍者の4つに分類する。

第一の老忍とは、年老いた忍者キャラクターを指す。見た目の特徴として、白髪に白ひげを生やした顔で描かれることが多く、杖をついていることもある。彼らは多くの場合、上忍(首領)であり、他の忍者たちに命令を下す立場にあるキャラクターである<sup>3)</sup>。例として、横山光輝『伊賀の影丸』の服部半蔵(図2)や岸本斉史『NARUTO - ナ

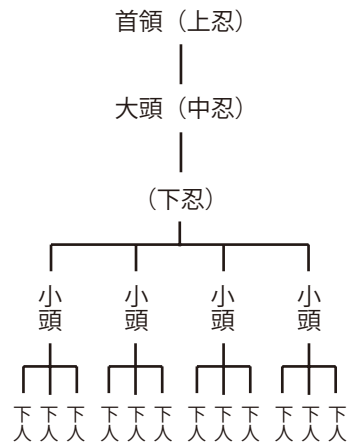


図1 忍者の身分階層  
(白土三平『ワタリ①』 p.11)



図2 服部半蔵  
(横山光輝『伊賀の影丸①』 p.23)

ルトー』の自来也をあげることができる。

第二の少年忍者とは、少年の忍者キャラクターを指す。少年忍者は、少年マンガにおいて主役、または主役の仲間やライバルのキャラクターである。彼らは多くの場合、下忍であり、常に命令を下される、身分的に最も低い立場にある。また、彼らは忍者として未熟であり、しばしば、青年忍者等の先輩忍者に忍術等の特訓を受けることがある。例として、白土三平『サスケ』のサスケ(図3)や岸本斉史『NARUTO -ナルト-』のうずまきナルトをあげることができる。

第三の青年忍者とは、大人の男性の忍者キャラクターを指す。彼らは多くの場合、中忍であり、上忍から命令を下される立場であると同時に、下忍に命令をする中間管理職的な立場のキャラクターである。また青年忍者は、下忍である少年忍者に忍術等を直接指導する指導者的な立場の人物として登場することも多い。例として岸本斉史『NARUTO -ナルト-』のはたけカカシや、尼子騒兵衛『落第忍者乱太郎』の土井半助(図4)をあげることができる。

第四の女忍者とは女性の忍者キャラクターを指し、「くノ一」と呼ばれることもある。女忍者も、少年忍者同様、最も身分が低い下忍として登場することが多い<sup>4)</sup>。ただし、忍者としては、他の男性忍者と互角またはそれ以上の実力をもつ存在として描かれる傾向がある。例として、白土三平『サスケ』の服部半蔵の娘(図5)や小山ゆう『あずみ』のあずみをあげることができる。

次章では、この4つの分類にしたがって、それぞれの忍者キャラクターのことばづかいを具体的に見ていこう。



図3 サスケ  
(白土三平『サスケ①』p.33)



図4 土井半助  
(尼子騒兵衛『落第忍者乱太郎①』p.32)



図5 服部半蔵の娘  
(白土三平『サスケ①』p.75)

### 3. 忍者キャラクターのことばづかい

#### 3.1 老忍のことばづかい

老忍の例として、作者も発表年代も異なるマンガ作品に登場する二人のキャラクターをあげよう。一人は、横山光輝の『伊賀の影丸』に登場する服部半蔵(以下、半蔵)である。半蔵は、徳川家に仕える服部家五代目領主(上忍)として、主人公の影丸をはじめとする部下の忍者たちに命令を下す立場にある。見た目は、髪の毛も眉毛も白く描かれており、かなり高齢の男性であることを思わせる風貌である(図2参照)。もう一人は、岸本斉史の『NARUTO -ナルト-』に登場する自来也である。自来也は「木ノ葉隠れの里」の「伝説の三忍」の一人であり、主人公のうずまきナルトに忍術を指導する。髪は白く長髪で、顔には歌舞伎役者風の隈取を

し、下駄を履いている（図6）。半蔵と自来也は、見た目はまったく異なっているが、主人公に命令を下したり、忍術を教えたりする立場にある高齢の忍者という共通点がある。これは、忍者マンガに登場する多くの老忍キャラクターに共通する特徴と言える<sup>5)</sup>。



図6 自来也  
(岸本斉史『NARUTO -ナルト-⑰』 p.139)

ここで、彼らのことばづかいを見てみよう。以下の（1）は半蔵、（2）は自来也のセリフである。

- (1) a. いまの鳴子で このへやは わしの部下に とりかこまれて いる  
 b. そうじゃ この一巻の巻物が 天下を くつがえす力を もっているのじゃ  
 c. もはや あの巻き物を 守りおおせるのは 影丸よりほか におらん  
 d. やつらは 変装した 兵助を おまえと 思いこん で おったのだな  
 e. しらぬで どうする やつとは 一度ならず 戦った ことがある  
 (横山光輝『伊賀の影丸①』)

- (2) a. やる気のない ワシより 切れ者の ツナデ姫の方が 火影に向いとる  
 b. 聞いた通り来てみりゃ… 本当に ラーメンばっか 食つとるようじゃのオ…  
 c. これまで ここから 抜け出せた奴は おらんのオ!  
 d. ナルト お前は じっと しとれ!  
 e. 時間は 無駄には使わん

(岸本斉史『NARUTO -ナルト-⑯、⑰』)

服部半蔵と自来也のことばづかいには、次のような共通した特徴がある。(a) 自分のことを「わし(ワシ)」と称する。(b) 断定を表す助動詞として「じゃ」を用いる。(c) 人間の存在を表す動詞として「おる」を用いる。(d) 動作の進行や状態を表す補助動詞に「おる」を用いる<sup>6)</sup>。(e) 否定を表す助動詞として「ぬ(ん)」を用いる。

このようなことばづかいは、服部半蔵や自来也以外の老忍キャラクターにも共通して見られるものである。しかし、このようなことばづかいは、忍者マンガ以外のマンガに登場するキャラクターにも見ることができる。以下の（3）は、さくらももこ『ちびまる子ちゃん』に登場する友蔵のセリフである。

- (3) a. わしは たしか今日 みかけたぞ  
 b. そうそう 日本人の心 じゃよ  
 c. 大丈夫じゃよ わしがおるし  
 d. ヒロシ…… さすがわしの子じゃ よく似てきおったわい  
 e. コロンボが どうやって犯人の 証拠をあばいたのか 知りたくて眠れんよ  
 (さくらももこ『ちびまる子ちゃん⑨、⑩、⑪』)

まる子の祖父である友蔵のことばづかいは、半蔵や自来也のそれと同じである。金水（2011）は、友蔵のような「老人」のキャラクターが用いる役割語を＜老人語＞と呼んでいる。半蔵や自来也は＜老人語＞の使い手なのである。老忍も、老人である限りにおいて、＜老人語＞で話すキャラクターとして描かれることは当然とも言えよう。すなわち、マンガのようなフィクションの世界では、忍者のような職種の違いを越えて、「老人」という属性を与えられたキャラクターに対しては＜老人語＞で話すことが期待されており、作者はそのような期待に基づいて、彼らに＜老人語＞を話させるのだと考えられる。

ただし、老忍であればことばづかいはまったく同じというわけではない。第一に、＜老人語＞を用いて話す頻度は、キャラクターによって異なりがある。たとえば、半蔵は、自来也や友蔵に比べて、＜老人語＞で話す頻度が低い。以下は、半蔵が、敵対する忍者に城に潜入されて秘伝の巻物を奪われたときのセリフである。

- (4) みたか… あの中を みられた のか……  
たいへんな ことになる たいへんな こと なる  
みたものは 口をふうじる ために 殺されなければ ならない だろう…  
(横山光輝『伊賀の影丸①』)

(4)のセリフには、(1)と異なり、＜老人語＞の特徴がまったく見られない。(4)のことばづかいは、きわめて＜標準語＞に近い<sup>7)</sup>。半蔵は、しばしばこのようなことばづかいをすることがある。なぜ半蔵のことばづかいは、＜老人語＞と＜標準語＞という「ぶれ」があるのだろうか。これには次のような理由があると考えられる。『伊賀の影丸』という作品において、半蔵は「上忍（領主）」という、忍者社会における最上位の身分の人物として設定されている。この身分の高さ、すなわち高貴さが、半蔵（または作者）に＜老人語＞を使う（使わせる）ことをためらわさせるのだと考えられる。＜老人語＞には親しみやすい印象が伴う。私たちは、＜老人語＞で話すキャラクターに対して、「やさしいおじいちゃん」といったイメージを抱きがちである。たとえば、『ちびまる子ちゃん』の友蔵はまさにそのようなキャラクターとして造形されている。友蔵のセリフはほぼすべて＜老人語＞であり、「ぶれ」がほとんどない。一方、半蔵は、「老人」であると同時に「上忍」である。「上忍」という立場が「老人」であることを凌駕したとき、その語り口は、高貴な身分にふさわしい＜標準語＞になるのだと考えられる。

次に『NARUTO -ナルト-』の自来也のことばづかいをもう少し注意深くみてみよう。自来也は、＜老人語＞以外にも、半蔵や友蔵が用いることがない特殊なことばづかいをすることがある。以下は、自来也が、彼を見くびったような態度をとったうずまきナルトに対して発したセリフである。

- (5) 蝦蟇の仙人とは 仮の姿！ 何を隠そう このワシこそが！  
北に南に西東！ 斉天敵わぬ三忍の 白髪童子蝦蟇使い！  
泣く子も 黙る色男！  
“自来也様” たあ～ ワシのことよ！！  
(岸本斉史『NARUTO -ナルト-⑩』)

(5) のセリフには、自称詞の「ワシ」以外に＜老人語＞の特徴は見られない。(5) のことばづかいには、体言止めや漢語の多用、「とは [towa]」の後部が音声的に融合して「たあ [ta̠]」になるといった特徴が見られる。このような特徴は、歌舞伎で役者が見得を切って名乗りをあげるときや、または歌舞伎役者以外の人がそれをまねて言うようなときの言い方に見られる。このようなことばづかいを＜歌舞伎語＞と呼んでおこう。自来也が＜歌舞伎語＞を用いることがあるのは、彼のキャラクター性に由来していると考えられる。すでに述べたように、自来也の風貌には、顔の隈取、下駄履き等、歌舞伎役者を模したと思われる部分が少なからずある(図 6 参照)<sup>8)</sup>。自来也は「老人」キャラクターであると同時に「歌舞伎役者」キャラクターなのである。そのため、彼が見得を切るような場面では、前者が背後に隠れ、後者が前面にせり出してくる。その結果、＜老人語＞ではなく＜歌舞伎語＞で語ることになるのだと考えられる。

以上、老忍キャラクターは＜老人語＞とその他の役割語を使い分けていることを見た。これには、老忍キャラクターが「老人」以外のキャラクター性も与えられていることに関係があると考えられる。このようなことばのスタイル選択上の違いに加えて、老忍のことばづかいには、語彙や表現形式の選択にも違いが見られる。たとえば、＜老人語＞の使い手がよく用いる終助詞に「のう」がある。すでにあげた(2b)や(2c)のセリフからもわかるように、自来也は「のオ」をよく用いる。また、以下の(6)のセリフから、友蔵も「のう」を用いることがわかる。

- (6) a. そうじゃよ よく知つとる のう  
 b. 福袋かあ なつかしいのう 何がはいってるかな  
 (さくらももこ『ちびまる子ちゃん⑨』)

しかし、服部半蔵は「のう」を用いることがない。同じ＜老人語＞の使い手でありながら、このような違いがあるのはなぜだろうか。「のう」は「文末について感動を表す」とされている<sup>9)</sup>。すなわち、文末に「のう」が付加されることによって、話し手が事実や意見を冷静に語るというより、話し手自身の心情を通過して語られたというニュアンスを伴う。このようなニュアンスは、老人が過去の出来事についてしみじみと語るような語り口に効果的である。これが、＜老人＞キャラクターが「のう」をよく用いる理由だと考えられる。しかし、このような語り口は、「上忍」である半蔵にはふさわしくない。彼は、「上忍」として、部下の忍者たちに対して、自身の感情を排し、冷静に命令を下す立場にある。すなわち、彼の高貴な身分が「のう」を使いづらくしているのだと考えられる。

以上、老忍のことばづかいについて見た。老忍は＜老人語＞の使い手であるが、与えられているキャラクター性によって、その使い方に違いがあることがわかった。彼らは＜老人語＞の使用をデフォルトとしつつも、そのキャラクター性によって、他の役割語を用いたり、使用する語彙や表現に制限があるのである。

### 3.2 少年忍者のことばづかい

次に少年忍者キャラクターのことばづかいを見てみよう。少年マンガにおいて、少年忍者はたいてい主人公である。役割語は、その性格上、もっぱら脇役のキャラクターに用いられるのであり、主役のキャラクターにはあまり用いられない(金水 2003、秋月 2014)。しかし、ある

作品の主役のキャラクターによって用いられた特殊なことばづかいが、後の他の作品の類似のキャラクターにも繰り返し用いられることで役割語として定着するということも考えられる。このようなことをふまえ、少年忍者キャラクターのことばづかいを、年代順にみていこう。

最初に、杉浦茂『猿飛佐助』の主人公さるとびさすけ（以下、さすけ）と、同『少年児雷也』の主人公児雷也のセリフをみてみよう。『猿飛佐助』は昭和29年から30年にかけて『少年少女おもしろブック』に、『少年児雷也』は昭和31年から32年にかけて『少年』に、それぞれ連載された。

- (7) a. せっしゃは さるとび さすけで ござる (杉浦茂『猿飛佐助』)  
b. じつは せっしゃじゃ おい 怪盗白十字 秘帖は ここにはないとき  
(杉浦茂『少年児雷也』)

さすけも児雷也も自分のことを「せっしゃ」と称している。「せっしゃ（拙者）」は、本来、謙譲語であり、自分を他者より低めて言うときに用いられる。また、さすけは文末に「ござる」を用いている。「ござる」は、本来、存在を表す動詞「ある」や補助動詞「(て) ある」の丁寧語であるが、現在の話しことばでは「ございます」や「(で) ございます」の形で用いられる。ゆえに、「せっしゃ」も「ござる」も、現在では、もっぱらヴァーチャルな世界で用いられる役割語とみなせる。昭和30年代の日本語の話しことばの実態は明らかでないが、すでに「せっしゃ」や「ござる」が、忍者キャラクターまたは「侍（さむらい）」キャラクターの役割語として用いられていた可能性は高い。

児雷也のことばづかいには注目すべき点がもう一つある。それは、彼が文末に「じゃ」を用いていることである。3.1で述べたように「じゃ」は<老人語>である。なぜ少年忍者である児雷也が<老人語>の「じゃ」を用いて話すのであろうか。金水(2008)は、<老人語>の定着には、「近代のメディアの発達と新しいジャンルの発展が大いに力を与えた」とし、次のように述べている。

伝統的な落語・講談は近代的な出版メディアに乗って速記本、『立川文庫』を生み出し、さらに『少年倶楽部』のような少年雑誌の世界へとつながっていく。<老人語>はここで、「博士」という新しいキャラクターと出会い、さらにマンガやアニメ作品の世界の中で増殖していくのであった。(p.229)

昭和30年代初めには、マンガの中で「(老) 博士」というキャラクターは十分定着しておらず、当時の人々の中には、「『(老) 博士』は『じゃ』を用いて話す」というステレオタイプはまだできあがっていなかったと考えられる。すなわち、当時の人々は「老人」以外のキャラクターが「じゃ」を用いて話しても、現代の私たちほど違和感を抱かなかつたであろうことが予測できる。つまり、昭和30年代初めには、「じゃ」は忍者キャラクターの役割語か、または児雷也というキャラクター特有のことばづかいとして受け入れられる可能性があったということである。

続いて、藤子不二雄<sup>④</sup>『忍者ハットリくん』の主人公ハットリカンゾウ（以下、ハットリくん）のセリフを見てみよう。この作品は昭和39年から43年にかけて『少年』に連載された<sup>10)</sup>。

- (8) a. せっしゃ ハットリ カンゾウ と申す  
 b. ここは どこで ござる ずいぶん 人が多いで ござるな  
 (藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>『忍者ハットリくん<sup>①</sup>』)

ハットリくんは、自分のことを「せっしゃ」と称し、文末に「ござる」を用いている。ハットリくんのことばづかいは、さすけや児雷也のことばづかいとよく似ている。しかし、ハットリくんは、文末に「じゃ」を用いることはない。ここから次のようなことが推測できる。昭和30年代末から40年代初めにかけて、マンガの世界では、「(老)博士」のキャラクターが広まり、そのことばづかひも定着した。すなわち、「じゃ」が<老人語>の1つとして定着することによって、それは少年忍者のことばづかひにはそぐわないものとなった。その結果、「せっしゃ」と「ござる」が少年忍者キャラクターの役割語として残されたのである。

同年代に連載されたマンガとして、白土三平『サスケ』の主人公サスケのセリフも見ておこう。この作品は、昭和36年から43年にかけて『少年』で連載された。

- (9) この におい ………  
とうちゃんの においだ!  
 そうか とうちゃん がイノシシにばけて おいらを たすけて くれたのだ!  
 (白土三平『サスケ<sup>①</sup>』)

サスケは自分のことを「おいら」と称している。サスケは自分のことを「せっしゃ」と称することはないし、文末に「ござる」や「じゃ」を用いて話すこともない。サスケは、前述のさすけや児雷也に比べてより若い年齢のキャラクター（小学校低学年くらいか）として設定されており、そのことばづかひも、父親を「とうちゃん」と呼ぶなど、子どもっぽいものになっている。作品中において、サスケは「忍者」であると同時に、「幼い子ども」であることが強調されて描かれている感がある（図3参照）。サスケが「ござる」や「じゃ」を用いないのは、そのようなことばづかひが「幼い子ども」のイメージと一致しないためと考えられる。

少年忍者の最後に、現代の忍者マンガに登場する主役のキャラクターである岸本斉史『NARUTO -ナルト-』の主人公うずまきナルト（以下、ナルト）と、尼子騒兵衛『落第忍者乱太郎』の主人公猪名寺乱太郎（以下、乱太郎）のことばづかひを見てみよう。『NARUTO -ナルト-』は平成11年から『週刊少年ジャンプ』で、『落第忍者乱太郎』は昭和61年から『朝日小学生新聞』で連載中である。

- (10) オレもそこに 名を刻むって ことを 今 決めたーっ!!  
 英雄! 英雄! 犬死になんか するかってばよ!!  
 (岸本斉史『NARUTO -ナルト-<sup>②</sup>』)

- (11) わたしも…  
 だけど、すごい荷物だね きみの家はお金持ち?  
 うちの両親はヒラ忍者でね  
 (尼子騒兵衛『落第忍者乱太郎<sup>①</sup>』)



自分のことを、ナルトは「オレ」、乱太郎は「わたし」と称する。彼らもまた「せっしゃ」や「ござる」を用いて話すことはない。(10) や (11) のセリフだけから、彼らが忍者キャラクターであると想像することは困難だと感じられるだろう。むしろ彼らは、現代少年マンガに登場する、典型的な主人公キャラクターとしてとらえることができる。すなわち、ナルトは「野生派男子」であり、乱太郎は「知性派男子」なのである(秋月2014)。『NARUTO -ナルト-』と『落第忍者乱太郎』は、忍者マンガというよりは、それぞれ、「忍術をモチーフにした格闘(バトル)マンガ」「忍術をめぐるギャグマンガ」とみなすほうがふさわしいように思われる。言い換えるなら、両作品においては、彼らが忍者であることがことさらに主張されているわけではなく、格闘(バトル)やギャグのために、たまたま忍者が選ばれているにすぎないということである。昭和30年代前半の少年マンガにおいては、忍術を使う少年というだけで十分「立った」キャラクターになりえたが、現代の少年マンガで「立った」キャラクターであるためにはそれだけでは不十分であり、その他にも特別なキャラクター性が求められるという事情もあるだろう。ナルトや乱太郎の話し方が忍者っぽくなく感じられるとしたら、それはこのような理由によると考えられる<sup>11)</sup>。

以上、少年忍者キャラクターのことばづかいについて、昭和30年代から現代の少年マンガの主人公を中心に見た。昭和30年代前半の少年マンガに登場する少年忍者は、「せっしゃ」や「ござる」といった、へりくだったことばづかいをする。これは、少年忍者は、老忍と異なり、「下忍」であることが多く、身分的に最下位に位置する彼らは、必然的に、へりくだったことばづかいを用いることが多かったためであろう。しかし、昭和40年代以降、特に主役の少年忍者には、忍者であること以外にも特別なキャラクター性が与えられるようになり、ステレオタイプ的なことばづかいは避けられるようになる。一方で、児童向けのマンガにおいては「せっしゃ」や「ござる」を用いる少年忍者が登場し続けている。彼らが用いる「せっしゃ」や「ござる」には、もはや本来のへりくだりのニュアンスは薄く、忍者キャラクターの役割語になっていると言える。

### 3.3 青年忍者のことばづかい

次に青年忍者キャラクターのことばづかいを見てみよう。まず、青年忍者は、忍者マンガの歴史において、比較的最近になって登場したキャラクターであることに注意されたい。昭和30年代の忍者マンガにおいて、主役の少年忍者は、忍術を身につけた、すでに完成された忍者として登場するのが常であった。このような忍者マンガにおいては、少年忍者が忍術を用いた活躍が見せ場になっている。一方、現代の忍者マンガにおいて主役の少年忍者は、忍者としては未熟であり、これから忍術を身につけるべき存在として登場する。このような忍者マンガにおいては、少年忍者が指導者による特訓等を経て、忍術を身につけることで困難を克服する過程が見せ場になっている。ここにおいて、少年忍者を特訓する役割を果たすべく登場するのが、青年忍者である。

青年忍者の例として、『NARUTO -ナルト-』のはたけカカシ(以下、カカシ)と『落第忍者乱太郎』の土井半助(以下、半助)の二人をとりあげよう。カカシは、ナルト、うちはサスケ、春野サクラの三人に実践的な忍術の使い方を教えるための指導者として登場する。カカシは、演習の最中、三人に次のように言う。

(12) お前ら 忍者 なめてんのか  
あ!?

何の為に 班ごとの チームに 分けて 演習 やってると 思ってる  
つまり…

お前らは この試験の答えを まるで理解して いない……

(岸本斉史『NARUTO -ナルト-②』)

また、半助は、乱太郎が入学した「忍術学園」の教師である。彼は、忍術の授業の冒頭で次のように言う。

(13) 本日は 火器についての 講義をおこなう  
予習してくる ようにと いておいたが  
乱太郎 どうだ

(尼子騷兵衛『落第忍者乱太郎①』)

(12) や (13) のことばづかいには役割語の特徴が見られない。なぜ、青年忍者は役割語を用いずに話すのだろうか。彼らは、少年忍者たちの前では、彼らより上位の立場にあるため、「せっしゃ」や「ござる」を用いたことばづかいはふさわしくない。また、彼らは年齢的には比較的若いキャラクターとして設定されているため、老忍のような「わし」や「じゃ」等を用いたことばづかひも違和感がある。青年忍者にもっとも近い現実の存在は、学校の先生や部活等のコーチであろう。少年マンガの読者は、彼らを現実世界の先生やコーチに投影すると思われる。青年忍者のことばづかひに役割語が用いられないのは、彼らが、少年読者の身近にいる(現実の)先生やコーチになぞらえて造形されているためと考えられる<sup>12)</sup>。

#### 3.4 女忍者のことばづかひ

最後に女忍者のことばづかひを見てみよう。以下の(14)は、『サスケ』に登場する服部半蔵の娘(以下、半蔵娘)のセリフである。

(14) a. さあ その こけしを お出し! 今のうちなら まだ たすけて あげるわ  
b. アッ! どうしたの これ! おまえたち!  
c. ホホホホ 子どもだね あんなところに にげこんで……  
d. だが わたしも 服部半 蔵の娘 この しかえしは きっと してやる

(白土三平『サスケ①』)

半蔵娘のことばづかひには次のような特徴がある。①自分のことを「わたし」と称する。②「お出し」のような美化語を用いる。③文末に終助詞「わ」を付加する。④疑問文の文末に終助詞「の」を付加する。⑤笑い声が「ホホホホ」で表される。これらは<お嬢様語>の特徴である。半蔵娘は<お嬢様語>の話し手なのである。忍者マンガ以外のマンガに登場する<お嬢様語>で話すキャラクターは、いわゆる「良家の子女」である。しかし、半蔵娘は、物語の冒頭において、サスケとほぼ互角の忍術戦をくりひろげる「男まさり」の女忍者である。そんな

彼女が「お嬢様」キャラクターとして〈お嬢様語〉を話すキャラクターとして造形されているのはなぜだろうか。これには、忍者マンガ特有の世界観が関係していると考えられる。忍者の世界は男社会であるため、忍者マンガで活躍するのはもっぱら男性である。ゆえに、忍者マンガに登場する女性は、例外的な存在として扱われる。その結果、忍者マンガの女性キャラクターは、男性から見た「女性らしい」女性のステレオタイプを体現した存在として描かれる<sup>13)</sup>。つまり、女忍者は、長い髪で細身という、「女性らしい」姿（図5参照）という見た目ばかりでなく、そのことばづかいもより「女性らしい」〈お嬢様語〉を話すキャラクターとして造形されるのである。

ただし、以上のような、脇役として登場する「女性らしい」女忍者は、昭和30年代から40年代ごろまで少年マンガに登場したもので、現代では消滅しつつあると言える。現代の忍者マンガには、女忍者が脇役として（男）忍者の世界に「花を添える」のではなく、女忍者が主役として登場するものがある。彼女たちのことばづかいを見てみよう。

(15) 爺が……

いよいよ 俺たちは……

外界に 旅立つ時が もうすぐ だって言って たけど…

(小山ゆう『あずみ①』)

(16) わかりました…

この戦 私義元本隊を 見つけられるかに かかってるんですね

(重野なおき『信長の忍び①』)

(15) は小山ゆう『あずみ』の主人公であるあずみ、(16) は重野なおき『信長の忍び』の主人公である千鳥のセリフである。あずみも千鳥も〈お嬢様語〉を話すことはない。あずみは自分のことを「俺」と称する〈男ことば〉の話し手である。あずみは「女性らしい」体つきに描かれているが、自身の女性性には無自覚であり、作品では、あずみがそれに目覚めていく過程が描かれる。このようなキャラクターに〈お嬢様語〉はそぐわない。〈お嬢様語〉は、少なくとも自身の女性性には自覚的であり、それを演出（利用）しようとするキャラクターが用いる役割語だからだ。一方、千鳥は自分のことを「私」と称する〈標準語〉の話し手である。千鳥は、まるで忍者らしくない女忍者であり、強くて「女性らしい」という従来の女忍者像のステレオタイプに対するアンチテーゼとして設定されているように思われる。このようなキャラクターにも〈お嬢様語〉はそぐわない。彼女の役回りは「お嬢様」キャラクターにいじめられるキャラクターに近く、むしろ、〈お嬢様語〉を浴びせられる側に位置する。このような女忍者の登場は、女忍者が従来のステレオタイプから離れ、男忍者と同様に、それぞれが独自のキャラクター性をもちはじめていることを示している。

#### 4. おわりに

本稿では、忍者キャラクターのことばづかいについて考察した。忍者キャラクターのことばづかいには、次のような特徴があることがわかった。

- ①老忍は<老人語>を用いる傾向がある。ただし、与えられたキャラクター性によって、他の役割語を用いたり、使用する語彙や表現に制限がある。
- ②少年忍者は「せっしゃ」「ござる」のようなく忍者語>を用いる傾向がある。ただし、特に主役の場合は、個性的な特徴が与えられるため、<忍者語>を用いない。
- ③青年忍者は役割語を用いない。
- ④女忍者は<お嬢様語>を用いる傾向がある。ただし、女忍者が主役の場合には、個性的な特徴が与えられるため、<お嬢様語>を用いない。

以上のことは、忍者というキャラクターとことばづかひの結びつきがあまり強くないことを示している。忍者のことばづかひは、忍者であることよりも、他の属性によって決定されることが多いのである。すなわち、<忍者語>という役割語を設定する根拠は十分ではない。本稿では、「せっしゃ」と「ござる」を<忍者語>と呼んだが、これらは、<武士語>または<侍(さむらい)語>と呼ぶべきかもしれない。ただ、「武士」または「侍」キャラクターのことばづかひについてはまだ十分な研究が行われておらず、今後の課題である。また、「ござる」の起源についても不明な点が多い。「ござる」は、狂言における太郎冠者のセリフや、『浮世風呂』に登場する下層の男性のセリフに使用例がある<sup>14)</sup>。これらが、どのようにして<武士語>、さらには<忍者語>になっていったのかについても、今後の課題である。

## 注)

- 1) 海外のフィクションに登場する忍者キャラクター像は、日本のそれと異なっている。特にハリウッド映画に登場する忍者キャラクターは、Ninja と称され、日本のそれとは異なった描かれ方をしている。井上 (2014) は、Ninja はその肉体美が強調して描かれていることを指摘し、彼らは「その肉体美と Ninja としての技を通じてアメリカ古来の理想的な人間としての「セルフ・メイド・マン」を表現している」と述べている。本稿では、このような海外のフィクションに登場する忍者キャラクターは分析の対象としない。
- 2) 忍者が登場する小説やマンガは、中世や近世の日本を舞台にした時代物と、現代（または未来）社会を舞台にした現代物とに分けることができる。時代物は多かれ少なかれ史実に基づいた設定があり、一方、現代物はもし現代（または未来）に忍者がいたらという架空の設定で描かれることが多い。しかし、特にマンガにおいては、時代物であっても現代風のアレンジがされていることが少なくない。したがって本稿では、このような設定の違いは考慮しない。
- 3) もちろん、年配の忍者であっても、身分的に低い立場の者もいる。白土三平『カムイ外伝』の「老忍」に登場する名張の半助は、抜忍のカムイを追う下忍の一人である。本稿で言う「老忍」には、彼のような例は例外として含めない。
- 4) 女忍者には、本稿で言うところの「老忍」もいる。老忍の女忍者は、忍者を引退したご意見番のような役回りを与えられていることが多い。例として、岸本斉史『NARUTO -ナルト-』のチヨバアがあげられる。
- 5) 自来也の登場時の年齢は 50 歳と設定されているが、作品に登場するキャラクターの中では高齢のキャラクターに属するとみさせる。
- 6) (2d) の「しとれ [fitore]」は、「しておれ [fiteore]」の [e] が脱落した形とみさせる。
- 7) ここで言う<標準語>とは、金水 (2003) が言うところの、役割語としての<標準語>である。たとえば、いわゆるヒーローのキャラクターが用いることばづかひがそれにあたる (秋月 2013a)。
- 8) Wikipedia によれば、作者は、自来也を歌舞伎役者をモチーフに造形したという (2014 年 9 月 1 日閲覧)。
- 9) 『新調現代国語辞典 第 1 版』(1985) の記述による。
- 10) 『忍者ハットリくん』は、1981 年の新作アニメ化に伴い、同年より 1988 年まで、『コロコロコミック』『てれびくん』、小学館の学年別学習雑誌で新作が連載された。本稿で用いたセリフのデータは旧作のものである。

- 11) ナルトは、文末に「ってば(よ)」をよく用いる。現在、「ってば(よ)」はナルトだけが用いるキャラ助詞であり、主人公としての特徴をきわださせるために用いられている。ただし、将来的には、「ってば(よ)」が忍者キャラクターの役割語になる可能性は否定できない。
- 12) 作者の岸本斉史は、カカシは、最初「ござる」を用いるキャラクターとして設定したと言っている。ただし、この設定は、編集担当者との打ち合わせでボツになったと言う(『NARUTO -ナルト- ①』p.128)。この事実は、忍者キャラクターのことばづかいを考える上でたいへん興味深い。少なくとも、作者の中には、忍者キャラクターが「ござる」で話すというステレオタイプが存在し、カカシはそれに沿って造形されていたと考えられる。
- 13) また、女性であることを利用する女忍者もしばしば登場する。女忍者が登場するフィクション作品に、いわゆる「お色気」ものがあるのは、女忍者は、男性から見た好ましい女性像を体現しがちであることを示していると考えられる。
- 14) 「ござる」の使用例として、狂言には、次のようなものがある。
  - i) それに末広がりはござらぬか(狂言・末広がり)
  - ii) それがようござらう(狂言・入間川)また、式亭三馬『浮世風呂』の「前編・男湯の巻」に登場する「いんきよ」にも「ござる」の使用例がある。
  - iii) イエ、此頃は親類どもに病人がござって、
  - iv) おそらくは鵜飼の症でござらう。これらの例を見る限りでは、「ござる」は下層の武士が用いることばから年配の男性が用いることばに移行していったという推測ができるが、詳細は不明である。

## 資料

尼子騷兵衛『落第忍者乱太郎』1～55巻 朝日新聞出版 あさひコミックス  
小山ゆう『あずみ』1～48巻 小学館 ビッグコミックス  
岸本斉史『NARUTO -ナルト-』1～70巻 集英社 ジャンプ・コミックス  
さくらももこ『ちびまる子ちゃん』1～16巻 集英社 りぼんマスコットコミックス  
重野なおき『信長の忍び』1～8巻 白泉社 JETS COMICS  
白土三平『カムイ外伝』1～3巻 小学館 小学館文庫  
白土三平『サスケ』1～8巻 秋田書店 白土三平選集  
白土三平『ワタリ』1～3巻 秋田書店 白土三平選集  
杉浦茂『猿飛佐助』筑摩書房 ちくま文庫  
杉浦茂『少年兇雷也』1・2巻 河出書房新社 河出文庫  
藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>『新編集 忍者ハットリくん』1～4巻 復刊ドットコム  
藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>『新 忍者ハットリくん』1～4巻 復刊ドットコム  
横山光輝『伊賀の影丸』1～11巻 秋田書店 秋田文庫  
中村通夫(校注)『日本古典文学大系 63 浮世風呂』岩波書店

## 参考文献

秋月高太郎(2012a)「ウルトラマンの言語学」『尚絅学院大学紀要』第63号 p.17-30  
秋月高太郎(2012b)「動物キャラクターの言語学」『尚絅学院大学紀要』第64号 p.43-57  
秋月高太郎(2013a)「続・ウルトラマンの言語学」『尚絅学院大学紀要』第65号 p.29-42  
秋月高太郎(2013b)「「ぜ」の言語学」『尚絅学院大学紀要』第66号 p.11-24  
秋月高太郎(2014)「脇役男子の言語学—スネ夫やジャイアンはどのように話すのか—」『尚絅学院大学紀要』第67号 p.41-54  
井上稔浩(2014)「Ninjaになった日本の忍者」吉丸雄哉・他(編著)『忍者文芸研究読本』笠間書院  
金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店  
金水敏(編)(2003)『役割語研究の地平』くろしお出版  
金水敏(2008)『役割語と日本語史』金水敏・乾喜彦・渋谷勝己『日本語史のインターフェイス』岩波書店

金水敏（編）（2011）『役割語研究の展開』くろしお出版

佐藤至子（2014）『『兇雷也豪傑譚』から『NARUTO』へ』吉丸雄哉・他（編著）『忍者文芸研究読本』笠間書院

吉丸雄哉（2014）「忍者とはなにかーある忍者説話の形式を通じてー」吉丸雄哉・他（編著）『忍者文芸研究読本』笠間書院

吉丸雄哉・山田雄司・尾西康充（編著）（2014）『忍者文芸研究読本』笠間書院